

「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

プロジェクト責任者 井上順孝

1. プロジェクトの概要

本プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」は、2010年度から3年計画で発足したもので、本年度は3年目にあたる。本プロジェクトは2009年に正式に運用が開始された國學院大學デジタル・ミュージアムについて、研究開発推進機構内の諸機関や図書館などと有機的に連携しながらその円滑な運営を図るものであり、システム面の整備・改良を進めるものである。

他方では本プロジェクトの独自のコンテンツを作成し、充実させていく。独自の研究実施に当たっては、本プロジェクト代表者である井上順孝を研究代表者とする科学研究費補助金基盤研究(B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」が2011年度より4年間の計画で採択されたので、これと緊密に連携を取りながら事業を推進していく。また2011年1月9日に「宗教文化士」資格の認定制度の運営を担う「宗教文化教育推進センター」(CERC、サーク)が日本文化研究所内に設置されたが、同センターとの連携も有機的に進めていく。

以下ではまず本プロジェクトの2011年度の成果を簡単に紹介し、その上で2012年度の計画について概要を記す。なお、2012年度のプロジェクトメンバーは以下の通りである。

責任者 井上順孝

分担者

平藤喜久子、星野靖二、塚田穂高(専任教

員)、ノルマン・ハイヴンズ、黒崎浩行、齊藤こずゑ(兼担教員)、市川収、カール・フレレ、市田雅崇(客員研究員)、李和珍、ヤニス・ガイタニディス、加藤久子(PD研究員)、今井信治(研究補助員)、ケイト・ナカイ、土屋博、星野英紀、山中弘(客員教授)、マシュー・チョジック、キロス・イグナシオ、小堀馨子、エリック・シッケタンツ、高橋典史、ジャン＝ミシェル・ビュテル、山梨有希子、天田顕徳、齋藤知明、村上晶(共同研究員)

2. 2011年度の成果

(1) 機構全体に関わる成果

◇國學院大學デジタル・ミュージアム関連

2009年度に正式に稼働したデジタル・ミュージアムは逐次新機能を組み込みながら、機能を拡充し、かつデータベース等の充実を図った。画像の公開に関してはかなり整備されたので、動画をより積極的に公開していくための準備作業を行った。大手印刷会社の動画利用システムを見学するなどして、現在の技術水準を確認した。

全体の調整はデジタル・ミュージアムのワーキンググループのメンバーが意見交換して、各部門における作業の進行を確認しながら行った。

◇国際研究フォーラム「デジタル映像時代の宗教文化教育—開かれたネットワークによる取り組み—」

2011年10月16日に、國學院大學学術メディアセンター1階の常磐松ホールにおいて、

國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所と科学研究費補助金基盤研究 (B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」、宗教文化教育推進センター (CERC) の共催によって、国際研究フォーラム「デジタル映像時代の宗教文化教育」が行われた。

同フォーラムは 10 時半から 17 時半まで行われ、5 つの発題に続いてコメンテーターからのコメントと総合討議がなされた。発題者とタイトルは次の通りである。

- ・織田雪江 (同志社中学校・高等学校)「中学校社会科における宗教文化の取り上げ方と映像を用いた授業」
- ・岩谷彩子 (広島大学)「映像による宗教文化教育の課題—インドを映す映像とその受容のされ方をめぐって—」
- ・エリカ・バッフェッリ (ニュージーランド、オタゴ大学)「ニュージーランドの大学における Blended teaching と宗教文化教育—大学ティーチングの再考—」
- ・アラン・カミングス (イギリス、ロンドン大学)「一回性の限界—芸能教育におけるデジタル動画の活用—」
- ・平藤喜久子 (國學院大學)「宗教文化の授業とデジタル映像—その可能性と課題—」

これらを受けて、コメンテーターである岩井洋 (帝塚山大学) からコメントがあり、その後黒崎浩行、ノルマン・ヘイヴンズ (國學院大學) の司会で総合討議を行った。

同フォーラムには 100 名近くが参加し、充実した発表を受けて活発な議論がなされた。なお、同フォーラムを 1 時間に編集したものが、精神文化映像社の番組としてスカイパーフェク TV の 216ch で 2011 年 11 月 23 日と 30 日、2012 年 1 月 25 日に放送された。またこの番組は iPhone アプリでも視聴可能となったが、オンデマンドではない。「STYLECAST」をダウンロードすると、放映時間に合わせて

視聴できる。

(2) プロジェクト独自の成果

◇EOS の拡充

2011 年度は、『神道事典』の年表、および付録の表等の英訳を進めた。年表は本文と訳語を対照させながら作業を継続している。これらにより、EOS がいっそう拡充されることになる。

EOS は本文の英語版が中心であるが、「第四部神社」と「第八部流派・教団と人物」は韓国語版を作成することになっており、第四部のアップロードがなされた。2012 年度は「第八部流派・教団と人物」の韓国語訳を完了させ、校閲作業も行うこととなっている。

◇双方向翻訳

2011 年度は次の 4 点の翻訳を行った。日本語から英語へ 2 点、英語から日本語へ 2 点である。

・日本語から英語へ翻訳された論文
畔上直樹「戦前日本社会における現代化と宗教ナショナリズムの形成」(英訳 "Modernization"(gendaika) and the Formation of Religious Nationalism in Pre-War Japanese Society 翻訳者: GAITANIDIS, Ioannis)

板井正斉「高齢者・障害者の聖地旅行に見える聖性の再構築について—伊勢神宮における参拝ボランティア調査から—」(英訳 The Reconstruction of Sacredness as Seen in the Travel to Sacred Sites by the Elderly and Disabled: From an Investigation of Shrine Visit Volunteers at the Ise Shrines 翻訳者: LeFebvre, Jesse)

・英語から日本語へ翻訳された論文
Lori Meeks, "The Disappearing Medium: Reassessing the Place of Miko in the Religious Landscape of Premodern Japan" (邦訳: 「霊媒の消失—近代以前日本の宗教空間にお

けるミコの再評価―」 翻訳者：加藤之晴・加藤順子)

Loo M. TZE, "Escaping its past : recasting the Grand Shrine of Ise"(邦訳：「過去からの脱出―伊勢大神宮の再構築―」 翻訳者：高橋典史)

◇教派神道及び神道系新宗教の教団基礎資料のデジタル化

教派神道の資料のうち、神理教関係の資料のデジタル化について、神理教管長と最終的な打ち合わせをし、アップロード可能な画像、その内容等について了解を得た。メタデータを作成してアップロードする段階になった。

熊本県に本部のある神道系教団より委託された教団基礎資料について、教団から許可を受けて2008年度からデジタル化とデータベース化を進めているが、2011年度もこの作業を継続して行った。すでに1万件を越す資料についてデジタル化が進んでおり、これに基づく分析作業も入力作業と並行して開始した。

◇現代宗教に関する資料・データの収集とそのデジタル化

宗教文化士制度と関連して、主に宗教教育、宗教文化という観点から、現代宗教に関する資料・データを収集している。2011年度も引き続き、世界遺産と宗教に関するデータベース、映画と宗教に関するデータベース、高校の教科書にみられる宗教文化関連の用語データベース、宗教文化を学ぶに適した博物館・美術館のデータベースなど、幾つかのデータベースの構築を進めた。

さらに宗教文化を学ぶための基本書案内を加え、基礎的な知識を得やすいように工夫されたサイトも構築している。

◇科学研究費補助金基盤研究(B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」(研究代表者：井上順孝)との連携

科学研究費補助金によるこの研究は、本プロジェクト責任者の井上順孝を研究代表者として2011年度から4年計画で開始された。本プロジェクトメンバーの黒崎浩行、平藤喜久子、星野靖二、塚田穂高が連携研究者となっている。この他、学術資料館の加瀬直弥、神道文化学部の西岡和彦も連携研究者である。

「宗教と社会」学会のプロジェクト「宗教文化の授業研究会」との連携で、天理大学において授業研究会を開催した。

3.2012年度の研究計画など

◇國學院大學デジタル・ミュージアム関連

本プロジェクトの最終年度にあたるので、プロジェクト独自の事業については、一部区切りをつける計画を立てている。EOSの年表英訳と神名一覧の表等は入力段階での作業を終える予定である。『神道事典』の第八部の韓国語訳は一区切りとなる予定である。EOSは旧版と新版がともに公開される状態が続いているが、2012年度に旧版の処理について検討する。

本年度は研究成果を動画によって公開する方法の具体的検討を開始した。YouTubeへの投稿とiPhoneアプリの作成が当面の課題となるが、それぞれに検討すべき課題があるので、関連の情報を収集し、次年度からの新しいプロジェクトでの展開の準備をする。

全体に関わることとしては、旧日本文化研究所で開催した学術講演会の録音などについて、これを公開ないし、学術利用するための検討を開始した。またビデオテープ等として録画されたものもあるので、これらの利用に関する総合的な議論をする必要がある。2013年度からのプロジェクトで本格的に着手するので、そのための基礎的なデータを2012年

度中に整理する。

◇双方向翻訳

日本宗教と神道に関係する論文の相互翻訳については、2012年度も4本程度の論文の翻訳を予定している。すでに20本弱の論文が成果として公開されているが、これをよりアクセスしやすい形で公開・発信する方法について、現行の形式の再構成を含めて議論していく。

◇教派神道及び神道系新宗教の教団基礎資料のデジタル化

神道系教団より委託された教団基礎資料(書簡類約二万点)の整理についても一区切りをつける予定である。デジタル化されたデータからの分析に着手する。

◇宗教文化教育の充実のための教材作成

2011年度に引き続き、宗教文化教育・宗教文化士制度と連携し、特に動画による教材の制作について、制作環境の整備を含めて重点的に取り組む。

宗教文化士認定試験は、2012年6月24日に第2回、11月11日に第3回が行われる予定であるため、本プロジェクトも同事業に協力していく。

科学研究費補助金基盤研究(B)「宗教文

化教育の教材に関する総合研究」(2011～2014年度)との連携も継続する。「動画」を用いたオンライン教材の制作やまたその発信方法を重視していく方針であるので、動画作成チームを編成していく予定である。

◇国際研究フォーラム

本プロジェクトはCOEの第三グループによって推進された国際的な研究交流を継承し、毎年少なくとも1回は本研究所の主催で国際研究フォーラムを開催することとしている。すでに充実した研究者の国際的ネットワークが形成されているが、これをさらに発展させていく。

本年度は、宗教文化教育における動画の活用について議論するため、「宗教文化教育の射程—文学と美術をめぐって—」というテーマで9月29日に国際研究フォーラムを開催する予定である(執筆時点)。予定されている発題者4名とコメンテーター4名は以下の通りである。Roberta Strippoli(アメリカ、ビンガムトン大学)、有田英也(成城大学)、小池寿子(國學院大學)、Mark MacWilliams(アメリカ、セント・ローレンス大学)。コメンテーター:加瀬直弥(國學院大學)、伊達聖伸(上智大学)、平藤喜久子(國學院大學)、小原克博(同志社大学)。司会は井上順孝(國學院大學)が務める。